

教 育 研 究 業 績

2019年5月1日

氏名：小原（井坂）由美子

学位：家政学修士

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
心理学 生活科学	母子関係 児童学 比較心理 エソロジー	
主要担当授業科目	動物学と子ども理解 比較保育概論	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		「該当なし」
2 作成した教科書、教材		
①現代の乳児保育（再掲） 建帛社（全186頁）	平成4年 3月	（全体概要） 乳児の保育について様々な領域にわたって解説した教科書である。保育のなかでも乳児に対する保育はその子どもの発達において非常に重要なものとされている。そうした視点から幼児に関する働きかけなどを理解させようとしたものである。 （担当部分概要）P39～P64 発達全般の法則性－環境との相互作用、発達のリズムと個人差、順序性、分化と統合－についてみた後、胎児期の発育、神経系の発育、運動性、感覚と認知、情緒と社会性、対人関係、ことばの発達について解説した。 （井坂〔小原〕由美子、伊藤わらび、金村美千子、川合貞子、山岸道子）
②保育の中の保健（再掲） 萌文書林（全208頁）	平成5年 1月 平成22年 11月 （改訂）	（全体概要） 小児保健全般について様々な視点から論じた教科書である。小児保健は、行政・制度、あるいは医療など多岐にわたる。こうした点について多くの解説を加えている。 （担当部分概要）P84～P104 子どもの健康を守るためには、発育、発達全般を理解する必要がある。子どもの発育全般のうち、精神・運動機能の発達について解説した。すなわち、その基礎としての神経系の発達、運動機能の発達、感情、ことばの発達、精神発達の評価について書いた。改訂に当たって、精神の保健についての記述を加えた。 （井坂〔小原〕由美子、巷野五郎、高橋悦二郎、中川英一、鈴木みゆき、鈴木洋、野田智子、宮尾益知）
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
①学生による授業評価	平成9年9 月	「東京成徳短期大学平成8年度年次報告書」に、平成8年12月に実施された「学生へのアンケート調査」の結果が公表された。本調査中、「本学の授業の中であなたが満足できる授業がありますか。特に良かったと思う科目名を一つだけ書きなさい」の質問項目に対し、幼児教育科1年生の172名中46名が、担当する小児保健を上げた。これは学内での2位に相当した。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
① 特定非営利活動法人 野生生物保全論研究会「JWCS ワイルドライフ・カレッジ2003」	平成15年 11月	動物に対する人間の認識の歴史を概観した上で、動物を機械と同様にみなす近代科学を超える野生動物の認識が必要であることをふまえて、保全（保護）と愛護を考ええる時期であるという講義をした。
②東京成徳大学子ども学部公開講座「変異する家族の中の子ども」	平成19年 8月	「動物の親子関係－脊椎動物・哺乳類そして人間（ヒト）」というタイトルで、比較保育的視点の紹介をおこなった。
③特定非営利活動法人 野生生物保全論研究会「JWCS ワイルドライフ・カレッジ2008」	平成20年 9月	「かわいい」をキーワードに、野生動物と人間の関係を考える講義と、上野動物園での行動観察を実施した。

④白梅学園大学子ども学研究所「第3回白梅子ども学講座」	平成21年11月	「人間（ヒト）とは何かー比較保育から考える」というタイトルで、オオカミ少女やポルトマンの生理的早産説の問題点を明らかにし、動物と人間の比較における今後の課題について講義した。
5 その他		特になし

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項

事項	年月日	概要
1 資格, 免許 中学校教諭一級普通免許状（保健科・家政科） 高等学校教諭一級普通免許（家庭科）	昭和51年 昭和56年	（昭51中一普第8865号） （昭56高一普第488号）
2 特許等		特になし
3 実務の経験を有する者についての特記事項		特になし
4 その他		特になし

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1. ユーカリの森に生きるふたごのコアラ	単著	昭和60年12月	文研出版 (全80頁)	オーストラリアに生息する有袋類のコアラの生態を、主に子育てと子どもの発育の視点からみた、子ども向け科学読み物。本格的な子宮をもたない有袋類と本格的な子宮をもつ真獣哺乳類との子育ての比較、比較保育の視点も入れた。コアラは子宮の代わりに育児嚢をもつが、このため真獣類よりも母子関係が密接になる可能性がある。母体外に出たにもかかわらず、他個体との接触の可能性が限られるからだ。この点から、コアラの社会性との関連も考慮して書いた。
2. 比較発達学	共著	昭和61年4月	ブレーン出版 (全252頁)	(全体概要) 動物と人間の成長と発達（行動形成）について、子育て、遊び、けんか、仲間、ことば、個性の形成の点から、これまでの各自の研究結果をまとめた。 浅見千鶴子編「比較発達学」に所収。 (担当部分概要) P39～P50 「哺乳類の子どもの誕生」 哺乳類中、有袋類を除く真獣類の誕生時点での発育状態を比較した。さらに子育て様式及び生活様式の比較から、人間の新生児はポルトマンが定式化した二次的就巢性ではなく、大型類人猿と同じ発育状態で生まれることを明らかにした。 (共著者：井坂〔小原〕由美子、岡野恒也、小山高正、江木明美、鮑田宣子、南徹広、田中みどり)
3. 動物の身の守り方	単著	昭和61年4月	桐原書店 (全47頁)	さまざまな動物の防衛行動について概説した、子ども向け科学図書。動物の防衛には、自分自身を守ることと子どもの防衛がある。 卵ではなく子どもの防衛は進化史的には魚類から見られるようになり、哺乳類と鳥類で特に進化した。子どもの防衛は、子宮と

4. 動物の子育て	単著	昭和 61 年 4 月	桐原書店 (全 47 頁)	<p>乳をもった哺乳類では雌にまかされることが多くなったが、ヘルパーの出現で乳を飲ませることと子の防衛を役割分担する種も出てきた。こうした子育ての比較の視点も入れて概説した。</p> <p>さまざまな動物の子育てのあり方について比較し、概説した子ども向け科学図書。動物の繁殖方法は、生殖細胞を放出する、受精卵を放出する、子どもにしてから放出する、子どもをある期間養育するというように、より手をかける方向へと進化してきた。この進化傾向を見た上で、動物の子育てが、進化の程度、親の生息場所、食物の手に入れ易さ、社会構成のあり方、雄と雌の結びつきのあり方などの生態に依っていることを強調した。</p>
5. 動物のコミュニケーション	単著	昭和 61 年 4 月	桐原書店 (全 47 頁)	<p>ことばによらない動物の伝達手段として、化学物質（におい）によるもの、身ぶりによるもの、音声によるものがある。それぞれの方法は、各動物の生活様式－雌雄関係、群れを作るか、子育てのあり方など－と相互に関連すること、鳥類と哺乳類では、母親以外の他個体を模倣することで伝達様式を完成させることも視野に入れて解説した。</p>
6. 世界の天然記念物 －哺乳類（5巻）	共著	昭和 62 年 7 月	<p>講談社</p> <p>1 巻：アフリカ・マダガスカル (全 135 頁)</p> <p>2 巻：地中海・中近東・インド (全 131 頁)</p> <p>3 巻：東南アジア・大洋州 (全 113 頁)</p> <p>4 巻：ユーラシア・北アメリカ (全 139 頁)</p> <p>5 巻：中南米 (全 139 頁)</p>	<p>(全体概要)</p> <p>生息地の破壊や密猟などによって個体数が少なくなり、絶滅が心配されている世界の哺乳類を取り上げ、形態、生態、分布状況とあわせて、減少の主因と対応について記述した。</p> <p>絶滅は、死亡率が繁殖率を上まわることでおこる。これを防ぐためには、子育てをする生物であるという哺乳類の特徴と、さらに人工飼育下で比較的良好に繁殖する種と子育てを放棄してしまう種がいることをふまえ、各種の実態を把握する必要性を考慮して書いた。</p> <p>(担当部分概要)</p> <p>担当部分は全般で抽出不可。 (井坂〔小原〕由美子、小原秀雄)</p>
7. 現代の乳児保育	共著	平成 4 年 3 月	建帛社 (全 186 頁)	<p>(全体概要)</p> <p>乳児の保育について様々な領域にわたって解説した書籍である。保育のなかでも乳児に対する保育はその子どもの発達において非常に重要なものとされている。そうした視点から幼児に関しての働きかけなどを理解させようとしたものである。</p> <p>(担当部分概要) P39～P64</p> <p>発達全般の法則性－環境との相互作用、発達のリズムと個人差、順序性、分化と統合－についてみた後、胎児期の発育、神経系の発育、運動性、感覚と認知、情緒と社会性、対人関係、ことばの発達について解説した。</p> <p>(井坂〔小原〕由美子、伊藤わらび、金村美千子、川合貞子、山岸道子)</p>

8. 保育の中の保健	共著	平成 5 年 1 月 平成 22 年 11 月 (改訂)	萌文書林 (全 208 頁)	<p>(全体概要) 小児の保健全般について様々な視点から論じた書籍である。小児保健は、行政・制度、あるいは医療など多岐にわたる。こうした点について多くの解説を加えている。 (担当部分概要) P 84～P 104 子どもの健康を守るためには、発育、発達全般を理解する必要がある。子どもの発育全般のうち、精神・運動機能の発達について解説した。すなわち、その基礎としての神経系の発達、運動機能の発達、感情、ことばの発達、精神発達の評価について書いた。 改訂に当って、精神の保健についての記述を加えた。 (井坂〔小原〕由美子、巷野五郎、高橋悦二郎、中川英一、鈴木みゆき、鈴木洋、野田智子、宮尾益知)</p>
9. 幼児教育リーディングズ	共著	平成 15 年 4 月	北大路書房 (全 191 頁)	<p>(全体概要) 子ども研究を、発達、幼児教育・福祉専門職として、臨床心理学、子ども研究の周辺の 4 部構成で紹介した、子ども研究入門書。深谷昌志、中田カヨ子編。 (担当部分概要) P 161～P 172 「4 部 子ども研究の周辺から」の 3 章 哺乳類の子育てが示唆するもの(母子関係再考の基礎として)」というタイトルで書いた。 まず哺乳類の中で最も進化している動物群の 1 つであるウシ科動物の母子のあり方で類型化されているハイダーとフロアーの、進化的、生態学的な意味を分析した。そのうえで、森林からサバンナに進出した人類の先祖は、森林棲の大型類人猿とは異なり、サバンナに生息するアフリカ産ウシ科動物のハイダーと似た母子のあり方をとったのではないかと、これはポルトマンの人間論の全く違った角度からの再考を迫るのではないかと問題提起した。 (共著者：深谷昌志、中田カヨ子、今井和子、大國ゆきの、宮下恭子、金城悟、埴和明、深谷和子、小林厚子、開原久代、周建中、加藤理)</p>
10. 道具と人間	共著	平成 16 年 3 月	明治図書	<p>(全体概要) 185 頁 「人間」を学ぶための総合的なカリキュラムの開発の一環として、道具を題材に、総合的な学習の時間のための中学生用教材として記述した。 (担当部分概要) P 106～P 110 人間が遊ぶ動物であることは良く知られているが、この能力が哺乳類から引き継がれていることを、「動物も道具で遊ぶ」の項で記述した。 (共著者：柴田義松、森田久子、佐竹幸一、永井治、岩田好宏、小原秀雄)</p>
(学術論文) 1. ヒトの新生児のいわゆる未熟さについての比較発達学的研究 (修士論文)	単著	昭和 56 年 1 月	昭和 55 年度 お茶の水女子 大学大学院 家政学研究科	A. ポルトマンが提出した『人間の生理的早産説』、あるいは『二次的単性説』について、比較発達学的に再検討した。単孔類と有袋類以外の真獣哺乳類 5 2 0 種の繁殖

			児童学専攻 (全 153 頁)	生理、子育ての様式、子どもの発育状態等を資料から収集し、出生時の発育状態を 4 段階に類型化したうえで、この 4 タイプの決定要因と見られる側面について分析した。その結果、人間の新生児は他のサル類、特に大型類人猿と同じ発育状態であり、生理的早産を想定すべき特別な未熟さはないことを明らかにした。
2. ヒトの新生児のいわゆる未熟さについての比較発達学的研究	単著	昭和 57 年 2 月	お茶の水女子大学 人文科学紀要 38 号 P 249～P 268	上記の修士論文の中心となった分析と結論部分を発表した。
3. ヒトの子どもの自然における位置	単著	昭和 58 年 2 月	生物科学 35(1) P 48～P 56	修士論文に新たに成獣と新生児のプロポーションの比較と、妊娠期間と新生児の体重との関係をさらに分析する—大型類人猿とだけ比べると人間の子は妊娠期間の割に体重が特別に重いかのように見えるが、サル類全体、ひいては哺乳類全体の中では人間は全く特別ではないことが明瞭だった—ことを加えた論文。以前より明確にポルトマンのあやまりを指摘し、生態の比較が欠けていることにも問題があるとした。
4. 日本における「ポルトマン理解」とその問題	単著	昭和 60 年 6 月	理科教室 28(6) P 94～P 99	これまでの研究成果をまとめて報告した上で、ポルトマンの生理的早産説が教育学や心理学の分野で広く受け入れられた背景について分析、考察した。ローレンツ以降のエソロジーを紹介しながら、安易に動物は本能で人間は学習という論理に陥ってしまう背景に、ある動物が具体的にどのような状態で生まれてくるかという博物的な知識の欠如があり、ここに理科教育の一つの課題があることも指摘した。
5. 空間配置からみた母子関係	単著	平成元年 3 月	東京成徳短期 大学紀要 22 号 P 67～P 72	母と子の自然な関係、どのような育児、保育が人間にとって望ましいものかを、自然的に問いなおす一環として、哺乳類の出生直後の母子のあり方を、東アフリカでの調査と文献研究から類型化した。従来母子のあり方は、子どもの発育状態から考察されることが多かったが、本論では発育状態とは別に、母子が一緒にいるか離れているかという点からの類型化が可能であり、比較生態的にはその方が有効かもしれないことを指摘した。
6. ボルクの発育遅滞説について	単著	平成 3 年 3 月	東京成徳短期 大学紀要 24 号 P 149-P 154	欧米ではほとんど無視されている A. ポルトマンを部分的(生理的早産説の部分)に評価している S. J. グールドは、ポルトマンが否定する人類進化における胎児化説を支持する。日本では、ポルトマンの紹介に子宮外胎児の表現が見られるように、個体発生における早産説と系統進化における胎児化説とが混同されている点を指摘し、混同の背景について分析した。

7. 比較生態学的にみた母子関係	単著	平成 7 年 6 月	獣医畜産新報 48(6) P488～P491.	従来まで子どもの発育状態と関連付けられることが多かった母子関係について、最も発育が進んだ状態で生まれる有蹄類に、母子がある期間離れている種がいることを取り上げ、母子関係の考察には母親の生態の分析が必要であることを明らかにした。生態の比較という視点は、ポルトマンの比較生物学には完全に欠けていたことにも触れた。
(その他)				
1. ヒトの寿命と食性	単著	昭和 52 年 2 月	アニマ 48 号 P74～P75	Journal of Human Evolution 5(2)に掲載された霊長類の寿命の進化、オーストラロピテクスの食物、霊長類の妊娠期間の3論文を、人類進化、すなわちヒト化と人間化の視点から考察し、紹介した。
2. お乳をのむ動物たち	共著	昭和 60 年 1 月	こどもの光 1 月号 P29～P35	哺乳類の特徴と分類、各類の典型的な種について、小学生向けに説明した。全文を小原由美子が書き、共著者小原秀雄は監修者の役割をはたした。 (井坂〔小原〕由美子、小原秀雄)
3. ポルトマンによる生理的早産説の再検討	単著	昭和 60 年 1 月	第 38 回日本保育学会大会 口頭発表	昭和 56 年から 60 年までの筆者の新生児の比較発達の研究の成果を報告した。ポルトマンの生理的早産説は教育界、保育界に広く受け入れられ、人間の教育可能性を示す生物学的根拠とされているが、この誤りについて指摘した。
4. 「イヌ どのようにして人間の友になったか」	単著	昭和 60 年 6 月	生物科学 37(3) P124、P131	1981 年に発行されたマクローリン著、澤崎坦訳、岩波書店刊の本書の批判的書評。
5. Museum of Man and Nature —博物館めぐり	単著	昭和 61 年 1 月	理科教室 1 月号 P81	第 4 回国際哺乳類学会後のエクスカージョンで見学したマニトバ州ウイニペッグにある本博物館を紹介した短文。北米大陸のツンドラと森林帯、その移行帯の自然と人間を適切に展示していた。
6. 保育カリキュラムと資料	共著	昭和 61 年 4 月 ～62 年 3 月	保育のひろば 7 (1)～7 (12) P58～P63	広義の乳児保育の対象である 0 から 2 歳児の保育カリキュラムを、1 年間に渡って例示した。 3 人の共同作業によるもので担当部分の抽出不可。 (井坂〔小原〕由美子、佐々木妙子、鈴木みゆき)
7. 今月のお弁当	共著	昭和 61 年 4 月 ～62 年 3 月	保育のひろば 7 (1)～7 (12) グラビア 1 P	主著者として、季節や行事に合わせた幼児向けのお弁当を、材料、作り方、熱量とともに 12 ヶ月に渡って連載した。 3 人の共同作業によるもので担当部分の抽出不可。 (井坂〔小原〕由美子、鈴木みゆき、高木都代子)
8. 母子の比較生物学的研究	単著	昭和 61 年 6 月	第 39 回日本保育学会大会 口頭発表	人間は他の動物に比べると特に未熟な状態で生まれるがゆえに、母親による世話が必要になるとよく言われることへの、比較生態学的な批判。
9. サイを守る人々	単著	昭和 63 年 2 月	道灌山学園だより P2,	東アフリカの保護区で動物を密猟者などから守るため、日々パトロールしている保護官が、劣悪な環境、装備でいることを紹介

10. 赤道直下のホカロン	単著	昭和 63 年 6 月	保育とカリキュラム 6月号 P13,	したエッセー。 毎年夏、調査に行く東アフリカの気候、天候を紹介したエッセー。多くの人がアフリカというときすぐ暑さを連想するが、7から9月の東アフリカは時にホカロンが必要になるほど寒く、日中はさわやかであることを紹介した。
11. 哺乳「類」のおもしろさ	単著	平成元年 6 月	理科教室 6月号 P6～P15	理科教員に向けて、哺乳類の生態と形態の相互関連について、具体例を上げつつ解説した。木の枝にぶら下がっていることが多いナマケモノの肝臓は、他の哺乳類での肝臓の位置から見ると背側に 130 度位回転して、木にぶら下がっていても胃を圧迫しないこと、こうした特殊性が、生まれたばかりの子どもにどの位出来上がっているかなどを解説した。
12. 大自然に生きる	単著	平成2年4月～3年3月	看護学生 4月号～翌年3月号 P26～P27	毎年調査に行っている東アフリカをはじめ、近所で出会う動物、国際学会後の調査旅行で出会った動物 12 種を、1 ヶ月に 1 種ずつ取り上げた連載エッセー。
13. 幼児の基本的習慣の発達に関する研究 (1) 3 歳、4 歳、5 歳の実態と発達傾向	共著	平成2年5月	日本保育学会 第 43 回大会研究論文集 掲載：P82～P83	最近の子どもたちは変わった、という声がよく聞かれるが、実態はどうなのであろうか。 家庭における躾の実態と躾に対する親の意識、および幼児の基本的な生活習慣の発達の状態を把握することを目的とし、幼稚園児約 2700 名を対象にアンケート調査を実施し、結果を分析した。調査項目は食事、睡眠、排泄、着脱、清潔に関する 88 項目で、3 歳までに自立が完成する項目は 21 項目、4 歳までに完成するのは 14 項目、5 歳までに完成するのが 4 項目であったが、5 歳過ぎないと完成しないものが 15 項目あり、手先の器用さに関するものが多いとの結果を得た。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (共同研究者：中田カヨ子、新谷俊夫、小沢恒三郎、岡崎比佐子、小林厚子、塙和明、石川洋子、徳田克己、井坂〔小原〕由美子)

<p>14. 幼児の基本的習慣の発達に関する研究 (2) しつけに対する母親の意識</p>	<p>共著</p>	<p>平成2年5月</p>	<p>日本保育学会 第43回大会研究論文集 掲載：P84～P85</p>	<p>母親が子どものしつけで大事にしていることは何か、現代の子どもに欠けると言われる挨拶、片付け、我慢するなど10項目の中から3項目選択するとともに、しつけ上問題視していることに関する自由記述による回答を得た。 各年齢ともに母親が一番大切にしているのは、挨拶することであるが、次いで3・4歳児では物を大切にすること、5歳児では約束を守ることが挙げられた。しつけで困ることとしては、自分の意思を押し通そうとする、言葉づかいが悪いなど生活態度に関する記述が多く見られた。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (共同研究者：岡崎比佐子、新谷俊夫、小沢恒三郎、中田カヨ子、小林厚子、塙和明、石川洋子、徳田克己、井坂〔小原〕由美子)</p>
<p>15. 幼児の基本的習慣の発達に関する研究(Ⅱ) (1) 3歳、4歳、5歳の実態と発達傾向</p>	<p>共著</p>	<p>平成3年5月</p>	<p>日本保育学会 第44回大会研究論文集 掲載： P440～P441</p>	<p>①幼稚園児を対象に基本的生活習慣に関する行動の実態を把握する。②基本的生活習慣の発達傾向を明らかにする、③発達傾向と基本的生活習慣との関係を検討することを目的とした継続研究で、4000余名を対象とした。 発達傾向を78項目を年齢別に見ると、3歳までに完成する(通過率85%)ものが約3割、5歳以上にならないと完成しないものが約2割であった。発達傾向をタイプ別に見ると、食事に関する項目は3歳までに完成するものが多いが、着脱に関する項目は完成が遅いという結果を得た。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (共同研究者：中田カヨ子、新谷俊夫、小沢恒三郎、岡崎比佐子、小林厚子、塙和明、井坂〔小原〕由美子)</p>
<p>16. 幼児の基本的習慣の発達に関する研究(Ⅱ) (2) しつけに対する母親の意識</p>	<p>共著</p>	<p>平成3年5月</p>	<p>日本保育学会 第44回大会研究論文集 掲載： P442～P443</p>	<p>①基本的生活習慣の発達において問題と思われる項目、②しつけに対する親の意識と性差の有無、③子どもの発達と親の意識との関連の検討を目的とした。しつけに対しては、男女児ともに挨拶することを最も重要視しているが、女兒の母親は話をよく聞くことを、男児の母親はがまんすることを大事にしているとの検定結果が得られた。また、どの年齢でもあまり重視していない項目は、食事を残さないこと、テレビの見方の結果を得た。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (共同研究者：小林厚子、新谷俊夫、小沢恒三郎、中田カヨ子、岡崎比佐子、塙和明、井坂〔小原〕由美子)</p>
<p>17. 赤ちゃんの不思議Q & A</p>	<p>単著</p>	<p>平成4年4月</p>	<p>オレンジページ8(8) P121～P124</p>	<p>乳幼児が示す、問題とされることが多い指しゃぶり、人見知り、夜泣き、かんの虫について編集者からの質問を受け、比較発達の学的、比較行動学的な視点からアドバイスした。取材協力。</p>
<p>18. 幼児の基本的習慣の発達に関する研究(Ⅲ)</p>	<p>共著</p>	<p>平成4年5月</p>	<p>日本保育学会 第45回大会研</p>	<p>本研究では保育園児1701名を対象に、①基本的生活習慣の発達状態を把握し、幼稚園</p>

(1) 食事・着脱について			<p>究論文集 掲載： P570～P571</p>	<p>児の調査結果と比較する、②保育園児の基本的な生活習慣の発達傾向を明らかにすることを目的とした。食事に関しては全体的に保育園児の方が完成が早く、着脱でも同様の傾向を見られた。一方で、「箸を正しく持つ」は5歳を越えても75%弱と完成度が低く、後ろのボタンかけ、紐の扱いなど背面での操作、手先に関係するものは保育園児・幼稚園児ともに難しいという結果が得られた。</p> <p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共同研究者：柳道子、中田カヨ子、小沢恒三郎、岡崎比佐子、小林厚子、埴和明、井坂〔小原〕由美子、金城悟、京林由季子)</p>
19. 幼児の基本的習慣の発達に関する研究(Ⅲ) (2) 睡眠・排泄清潔について	共著	平成4年5月	<p>日本保育学会 第45回大会研究論文集 掲載： P572～P573</p>	<p>睡眠、排泄、清潔に関して、①保育園児の基本的な生活習慣の発達傾向を明らかにすることを目的とした。調査項目は睡眠9、排泄15、清潔8項目中、睡眠で幼稚園児と有意差が見られたのは昼寝であり、生活状態の違いが生活習慣の自立と関係することを窺わせた。保育園児の方が早期に習慣形成されるものに排泄がある一方で、幼稚園児の方が早く習慣形成される清潔では一人で顔を洗う、夜寝る時歯を磨くなどの項目が確認された。</p> <p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p> <p>(共同研究者：金城悟、中田カヨ子、小沢恒三郎、岡崎比佐子、小林厚子、埴和明、井坂〔小原〕由美子、柳道子、京林由季子)</p>
20. あなたに代わって見聞帖—動物はどうしてあおむけに眠れないの？	単著	平成5年3月	<p>オレンジページ9(5) P87</p>	<p>動物はどうしてあおむけに眠れないのかという読者からの質問を受け、行動学的な視点とアフリカでの観察からアドバイスした。取材協力。</p>
21. 動物と仲良くなれる本	単著	平成5年10月	<p>クリニカルスタディ14(11) P80</p>	<p>エソロジーの祖、K. ローレンツ著「人イヌに会う」「ソロモンの指輪」をはじめ、大型類人猿に手話や図形言語を教えた「ココお話ししよう」「チンパンジー・マインド」などの本を紹介し、動物が想像以上に人間的であることに触れた。また、「世界は今—自然環境編1—8」では、動物とは無関係と考えている人でも、私たちの現在の生活のあり方が、いかに動物を圧迫しているかを明確にしていることを紹介した。</p>
22. アフリカゾウはいま	単著	平成6年11月	<p>週刊朝日百科 野生動物139号 P220～P221</p>	<p>1990年にワシントン条約で象牙の国際商取引での禁止されるまでと、それ以降の、東アフリカゾウの行動の明らかな変化について、論者の目撃例を報告した。</p>
23. アフリカゾウと地域住民の共存を図る緩衝地帯のモデル策定に関する基礎的研究	共著	平成6年12月	<p>トヨタ財団 1993年度研究助成 研究完了報告書 (全82頁)</p>	<p>(全体概要) アフリカゾウによる農作物被害が多いツァボ国立公園(ケニア)とマニヤラ湖及びタランギレ国立公園(タンザニア)に緩衝地帯を設定し、アフリカゾウの保護と地域住民との共存を図るための国際共同研究。代表は小原秀雄。他にミシガン州立大学のクレバン教授、タンザニア国立公園局長、ケ</p>

24. タンザニアにおける野生動物の利用	単著	平成 12 年 3 月	講談社 レッド・データ・アニマルズ 第 6 巻：アフリカ (全 239 頁)	ニヤ野生生物公社元局長が参加。 (担当部分概要) P70～P76 筆者の担当部分は、移動も含めたアフリカゾウの生態。 (井坂〔小原〕由美子、中村千秋、小原秀雄) (全体概要) 生息地の破壊や密猟などによって個体数が少なくなり、絶滅が心配されているアフリカの哺乳類を取り上げ、形態、生態、分布状況とあわせて、減少の主因と対応について記述した。 (担当部分概要) P74～P76 アフリカ諸国では、野生動物の保護活動に必要な資金を野生動物自身にまかなわせることがほとんどである。つまり、野生動物を見せる観光による収入と、野生動物を撃たせて得る収入、さらに野生動物産品（たとえば象牙）による収入などがある。これらの方法がタンザニアでは具体的にどのように展開され、どのような問題があるかを記述した。
25. 母子関係におけるしがみつきからハイダーへの変化	単著	平成 18 年 7 月	日本子ども社会学会第 13 回大会抄録集 掲載：P30～P31	東アフリカのサバンナに生息する多くのウシ科動物がしめす特殊な母子関係（ハイダー）の観察と、多くの哺乳類の母子関係に関する文研調査に基づき、人類進化の過程でサル類とは異なる母子関係が生じたのではないかとする論考を発表した。
26. 幼稚園教員の教職意識に関する研究	共著	平成 19 年 3 月	東京成徳大学 研究年報 Vol. 5	幼稚園教員の資質向上を図る研修のあり方を考える基礎として、幼稚園教員の教職意識を 657 名の教員にアンケートし、分析した。 (担当部分概要) P9～P24 回答者の属性分析
27. 幼稚園教諭の意識調査 I	共著	平成 19 年 5 月	日本保育学会 第 60 回研究論文 集 掲載： P338～P339	東京都内の私立幼稚園 2 園、公立幼稚園 2 園、北関東の公立幼稚園 1 園の 657 名の幼稚園教員にアンケートした結果から明らかになったことを口頭発表した。 (共著者：深谷昌志、神長美津子、遠藤良江、塙和明、五十嵐市郎、野上秀子)
28. 愛着再考	単著	平成 19 年 10 月	日本家政学会 児童学部会「児童学 研究」 No. 32 : P36	愛着について、哺乳類の観察から得られた実態に即して再考したいとするエッセイ。
29. 幼稚園教育に対する保護者の意識調査	共著	平成 20 年 3 月	東京成徳大学 研究年報 Vol. 7	(全体概要) 51 頁 東京都内の私立幼稚園 2 園、公立幼稚園 2 園、北関東の公立幼稚園 1 園に子どもを通わせている保護者、603 名の意識調査を実施し、分析した。 (担当部分概要) P10～P22 回答者の属性分析 (共著者：深谷昌志、神長美津子、遠藤良江、塙和明)
30. なぜ今でもポルトマンなのか	単著	平成 20 年 11 月	日本家政学会 児童学部会「児童学 研究」 No. 33 : P33～	ポルトマンの人間論（生理的早産説）が教科書に引用されることの多い家族関係論、脳の大型化との関連の 2 点について、事実と反することをエッセイ風に解説した。

<p>31. 幼稚園教員と保育士の教職・保育職意識の比較に関する研究</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21 年 3 月</p>	<p>P36 東京成徳大学 研究年報 Vol. 10</p>	<p>(全体概要) 52 頁 公立保育園保育士 390 名、私立保育園保育士 248 名に実施したアンケート結果と、先に実施した幼稚園教師のアンケート結果を比較し、分析した。 (担当部分概要) P10～P18 回答者の属性分析 (共著者: 深谷昌志、神長美津子、遠藤良江、塩谷香、塙和明、五十嵐市郎、山田麗子)</p>
<p>32. ポルトマンの功罪</p>	<p>単著</p>	<p>平成 21 年 6 月</p>	<p>総合人間学 3 139～143</p>	<p>1961 年に出版されたポルトマンの人間論は、今になって読み返してみると強引な論証がされているにもかかわらず、現在も定説として扱われている。哺乳類との比較によって人間の特徴を理解しようとする試みは現代も継承すべきだが、強引な論証方法と、そこから生まれた早産説は、捨て去るべきだろうと主張した。</p>